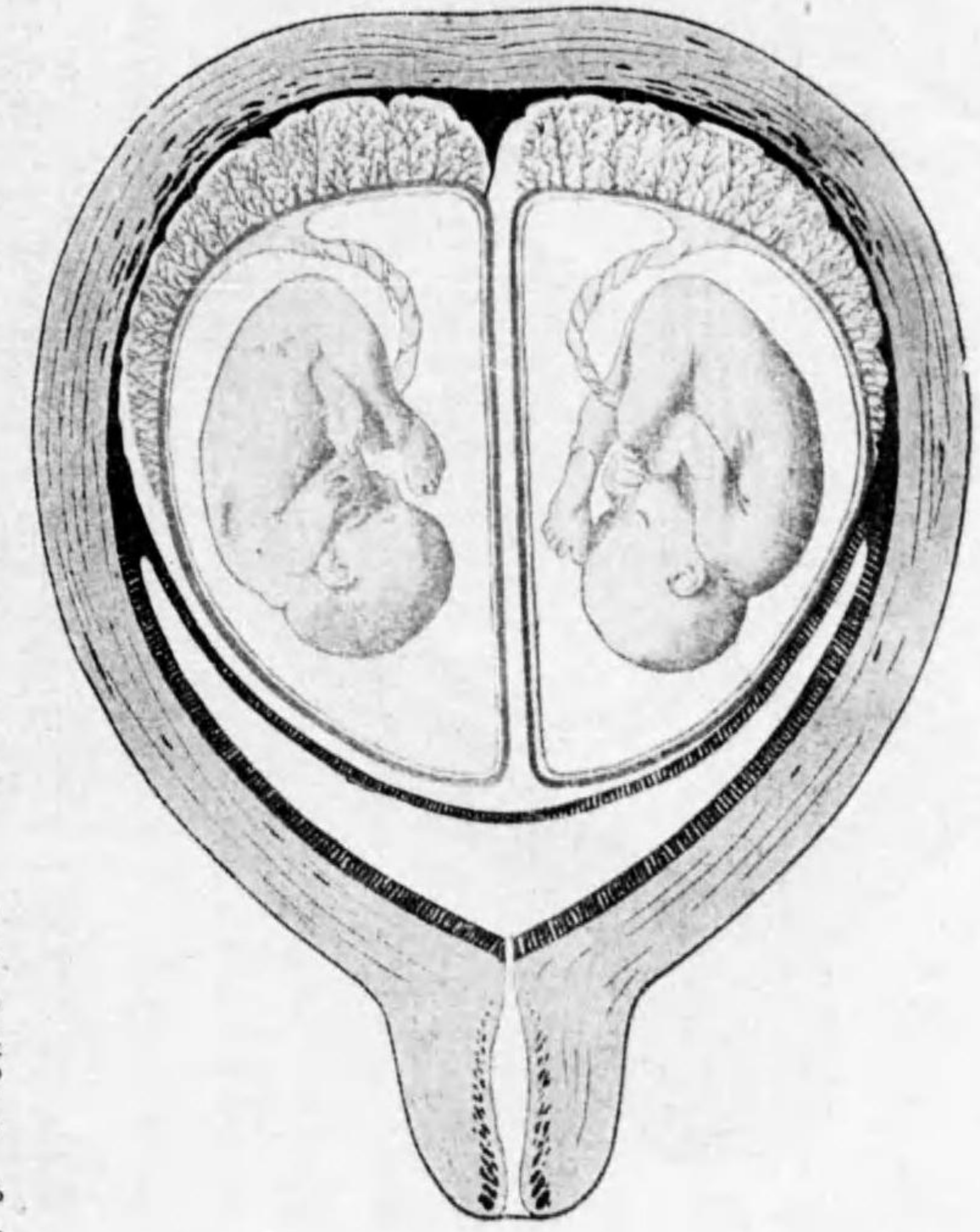


第九編 多胎妊娠及び多胎分娩
 一卵性雙胎は初産婦と經産婦とによりて其頻度を等ふるも、二卵性雙胎は經産婦、從ひて年長の婦人に多し。

圖 六 百 二 第

(圖型概)胎双性卵二るせ着附して接密相有な膜羊び及膜絡脈盤胎の有固自各りな通共はみの膜落脱轉離もるす

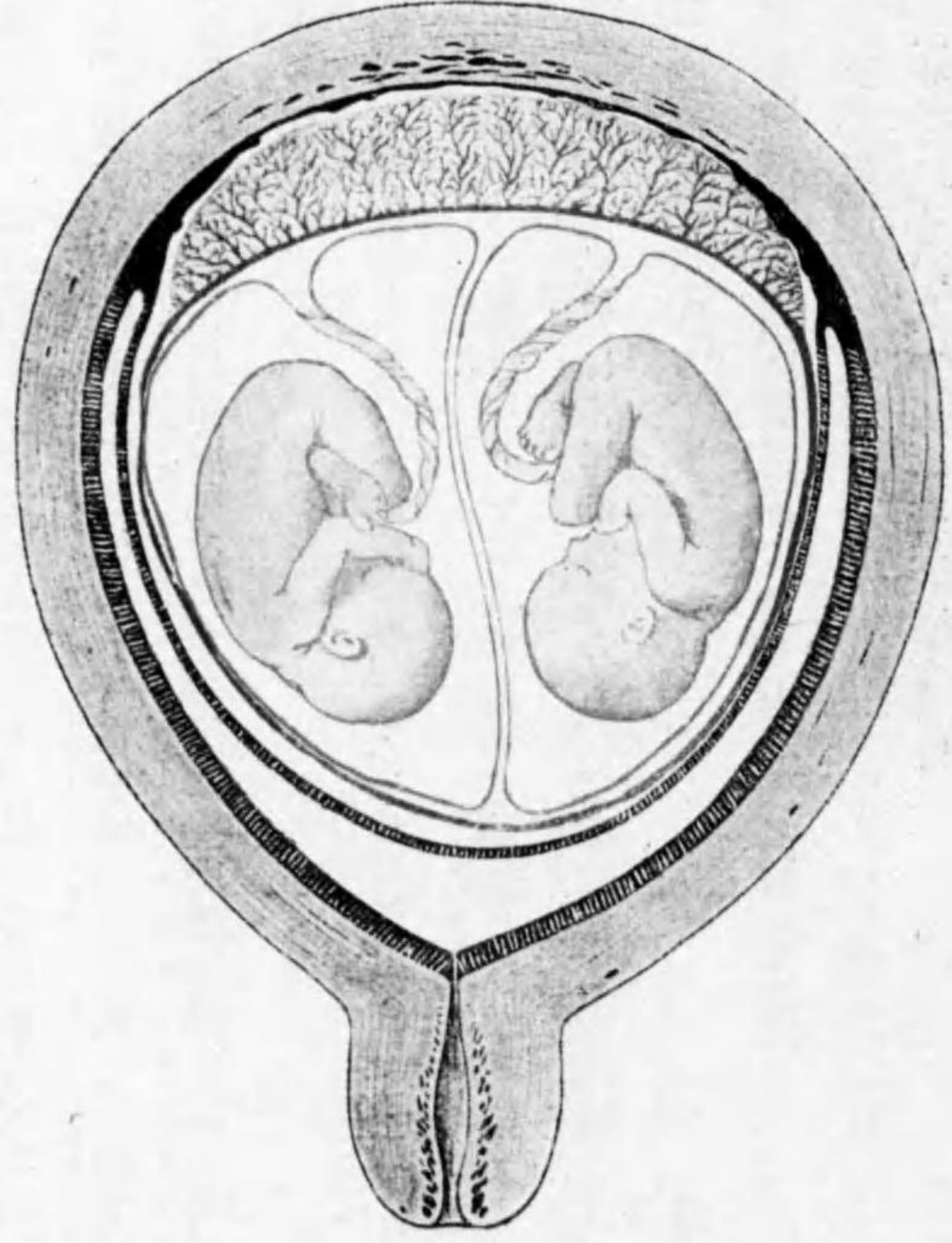


二卵性双胎

二卵性雙胎は同じ月經時に出でたる二卵(同一の臙胞より或は各別々の臙胞より出でたる二卵)が同時に受精せるによりて生ずるものにして、月經期を異にして排出せられし二個の卵

圖 七 百 二 第

(圖型概)胎双性卵一
 通共は盤胎び及膜絡脈膜落脱轉離す離分みの膜羊てしに



が受胎して發生すと云ふ説は信すべからず。二卵性雙胎にありては兩胎兒各々自己の羊膜、脈絡膜及び胎盤を有す。從ひて兩卵相離れて着床せる時には、各自に翻轉脱落膜を以て

包被せられ兩胎盤は分離す、されども通常兩卵相接近して着床するを以て兩卵は共通の翻轉脱落膜によりて包被せられ兩胎盤は密着して一個の大胎盤を形成す、然れども兩胎盤内

第一節 双胎妊娠

の血管は決して互に吻合せず、而して兩羊膜腔は、少なくとも各二枚の羊膜、脈落膜合計四枚の膜にて界せらる。

一卵性双胎

一卵性雙胎は一卵より二個の胎芽の生ぜしものなり、故に各自固有の羊膜を有するも、脈落膜は常に共通なり、従ひて胎盤も常に一個にして血管吻合す。而して兩者接近せるときは羊膜も共通にして一個の羊膜腔内に兩胎兒を生ず。故に一卵性雙胎にありては兩卵腔間の中隔は只二枚の羊膜よりなる。

一卵性双胎殊に羊膜共通せる者には重複畸形、無心等兒の畸形並に羊水過多症等の異狀頻發す。

以上の如く一卵性なりや、二卵性なりやは其娩出せる胎盤及び羊膜によりて區別し得。

又一卵性雙胎にありては兩胎兒は常に同性なるも、二卵性なる時は同性又は異性なり、故に異性なれば直に二卵性なるを知る。

品胎以上の多胎妊娠の成立は甚だ種々にして、例せば品胎にては

(一)、三卵性品胎

(二)、二卵性にして、其一つが一卵性双胎なる時

(三)、一卵性品胎

の三機轉可能なるも、通常一三卵性にして、一卵性なる事稀れなり。

要胎に於ても同様に一、二、三、四卵性の四種あり、以下此れに準ず。

母體の變化 雙胎妊娠にありては子宮の發育迅速にして腹部の膨大甚だしたため、種々の壓迫症狀を惹起し、妊娠障害は一般に強く且つ早期より現はる、又妊娠腎臟炎を來し易く屢子痲を併發す、羊水過多症を合併することも多し。

胎兒の發育 雙胎の四分の一は早期に妊娠中絶せらる、妊娠末期迄達せる者と雖も單胎妊娠に比して胎兒の發育不良なるを常とす。又兩胎兒の發育程度は種々にして常に同様ならず、時として甲胎兒のみ好く發育し、乙胎兒の發育佳良ならざるのみならず、往々中途にて死亡し羊水吸收せられ或は甲胎兒の爲に壓迫せられて扁平となりて所謂紙樣胎兒を形成する事あり。

診斷

診斷 疑徵

(甲)疑徵

- 一、腹部非常に膨大せること
- 二、腹部の中央に溝を生ずること(之れ兩胎兒の境界部と知る可し)
- 三、多胎妊娠の遺傳あるとき
- 四、胎兒先進部の強く下降せるもの
- 五、内外診所見の異なるもの

(乙)確徵

第一節 双胎妊娠

(一) 聴診上 數を異にせる胎兒心音を同時に二ヶ所に於て明瞭に聴取するか、又は其中間に於て漸次心音の微弱となり又は全く聴取し得ざる場所の存するとき

單に二ヶ所にて心音を聴取したりとて直に双胎りなす能はず、之れ心音は一側より他側に傳達することあればなり。

(二) 觸診 上一個の胎兒を以て説明し得べからざる多數の胎兒部分を觸知せるとき

(三) 分娩に臨み一兒娩出後尙子宮大にして心音を聴取し得るとき

要之雙胎の診断は常に容易ならず、第一兒の分娩後始めて確診せらるゝもの少からず、殊に一兒の發育不良なるものに於て然り。

第二節 三胎、四胎及び五胎妊娠

此等數胎妊娠に於ける母體の變化は雙胎に比して劇甚なるを常とす、且つ一層早期に中絶せらるゝもの多く胎兒數多きに從ひて其中絶益早し。

診断は雙胎と同一の根據によるも分娩前に確診せらるゝ事殆んどなし。

第三節 多胎分娩

分婉經過 多胎妊娠子宮は通常過度に擴張せるを以て原發性陣痛機能微弱を來し分婉第一期延長し數日を要することあり。

而して單胎分娩に於けるが如く、第一兒に屬する卵膜は卵胞を形成し、破水後第一兒を分娩す、次で暫時の間陣痛は休止し、次第に第二兒に屬する卵胞形成せられ、破水後第二兒産出せらる。第一兒産出後第二兒産出せらるゝまでの間歇は通常十五分乃至三十分なるも時として一時間以上を要す。胎兒は單胎妊娠の者に比し小なるを以て、分娩第二期は正規單胎分娩に比して短し、殊に第二兒の娩出は極めて容易なり。

第二兒娩出後胎盤は後産期陣痛によりて正規單胎分娩時の如くにして排出せらる。然れども稀れには第一兒娩出後之れに屬する胎盤先づ排出せられ、其後更に卵胞形成せられ第二兒の分娩開始せらるゝ事あり、勿論かゝる機轉は兩兒に屬する胎盤が全く分離する時にのみ起る。多胎妊娠の胎盤は單胎妊娠の者に比して大なる外に、前述の如く陣痛機能微弱を伴ふを以て、胎盤の剝離障害せられ、其排出も亦困難なり。故に屢後産期出血を來す。又第一兒娩出後胎盤の早期剝離を來し易し。

以上の外多胎妊娠は屢羊水過多症を伴ひて益陣痛機能を障害す。且往々早期破水後に臍帶の脱出、胎兒異常位置を合併す殊に第一兒分娩後第二兒は容易に異常位置を取る。

時として兩兒が同時に骨盤腔内に下降進入し此部にて嵌頓し分娩を障害する事あり、例令は骨盤端位にある第一兒の頭部が未だ骨盤入口を通過せざるに既に第二兒の頭蓋骨盤内に下降し、又は骨盤端位にある兩兒の軀幹部同時に骨盤内に下降し兩頭部骨盤入口部にて支へられ此の部にて嵌頓する事あり。

豫後 母子共に不良にして出産兒の死亡率は單胎兒の約倍數に昇る、之れ一般に兒の發育不良なる上、手術的操作を要する事多ければなり。

母體は前述各種合併症に因る外、子癇を誘發し易く、且産褥時發熱する者多し。

虚置 第一兒娩出時の處置は單胎分娩時と何等異なる處なし、此際特に注意すべきは、臍帶切斷に當り胎盤端を強く結紮し胎盤よりの出血を防止すべし、之れ一卵性双胎にありては

兩兒の血管吻合するを以て、第一兒の臍帶斷端より第二兒の血液流出する危険あればなり。

第一兒娩出後外診により第二兒の胎位、心音を檢し、陣痛に注意し、更に内診によりて先進部並に卵胞の状態を確め、異常なき時は自然の經過に任せ何等處置を要せず。然れども第一

兒娩出後胎盤の早期剝離を來し心音不良となる事あれば、此等の點につき監視を怠る可から

ず。

凡て多胎分娩は各種の危険を伴ふ者なれば、既に分娩前診斷定れる者は勿論、第一兒の分娩

によりて初めて之れを發見せる時に於ても直ちに醫師の來診を求むべし。

醫師の來着前第二兒の心音不良となる時は應急處置によりて胎兒の娩出を計らざる可から

ず、即ち縦位なればクリステルレル氏壓出法、或は用手挽出術により其目的を達するを得

べし、又横位ならば豫め外廻轉術によりて之れを縦位となし然る後挽出を計るべし、既に

第一兒の娩出により産道十分に開大せるを以て娩出容易なり。

第二兒娩出後特に子宮の收縮状態に注意すべし。

兒の發育は通常不良なるを以て早産兒と同様に取扱ふべし。

最後に注意すべきは双胎分娩なるも直ちに之れを産婦に告ぐ可からず、又産出したる兒の順

序を記憶し兄弟姉妹を誤らざる様心掛くべし。

第十編 正規産褥及び其取扱法

第一章 産褥の定義

定義

産褥とは分娩終了に始まりて、妊娠及び分娩によりて生じたる生殖器並に其周囲の變化が舊態に復し其機能を恢復するに至る迄の期間を云ふ。而して産褥は通常六乃至八週間持續し、其期間中多くは月經閉止す。月經來潮によりて通常産褥の終れるを知る、尤も授乳せる時は恢復迅速なり。

生殖器復舊完全なりとも、全然舊態に復するものに非るは妊娠條下に記せるが如し。かく産褥中にはる婦人を褥婦と云ふ。

第二章 生殖器の復故機轉

生殖器の復故機轉

分娩直後に於ける生殖器の状態 分娩終了すれば子宮は著しく收縮して硬固となり、球形を帯び、手拳の二倍大にして宮底は臍下三指横徑にありて、弛緩せる腹壁より容易に之を觸知せらる。

復故機能

子宮體部

第二百八十八圖 分娩直後に於ける子宮の圖



分娩直後子宮口は廣大にして容易に一手を通ずるを得可く、子宮口縁は不正にして屢々多くの裂傷を有し、腫も亦弛緩し廣潤にして通常多數の裂傷を認む。外陰部及び會陰も亦甚だしく弛緩し、屢強く腫脹し、裂傷を存す。子宮内腔は卵膜及び胎盤の剝離によりて新しき創面に變じ出血すと雖も、子宮の收縮と共に血管斷口も縮少閉塞し、且血管内に血栓を生じ漸次出血量少くなる。

而して以上の如き状態にある生殖器が時を経て舊態に復す、之を復故機能と云ふ。

以下各部につき復故現象を略述せん。

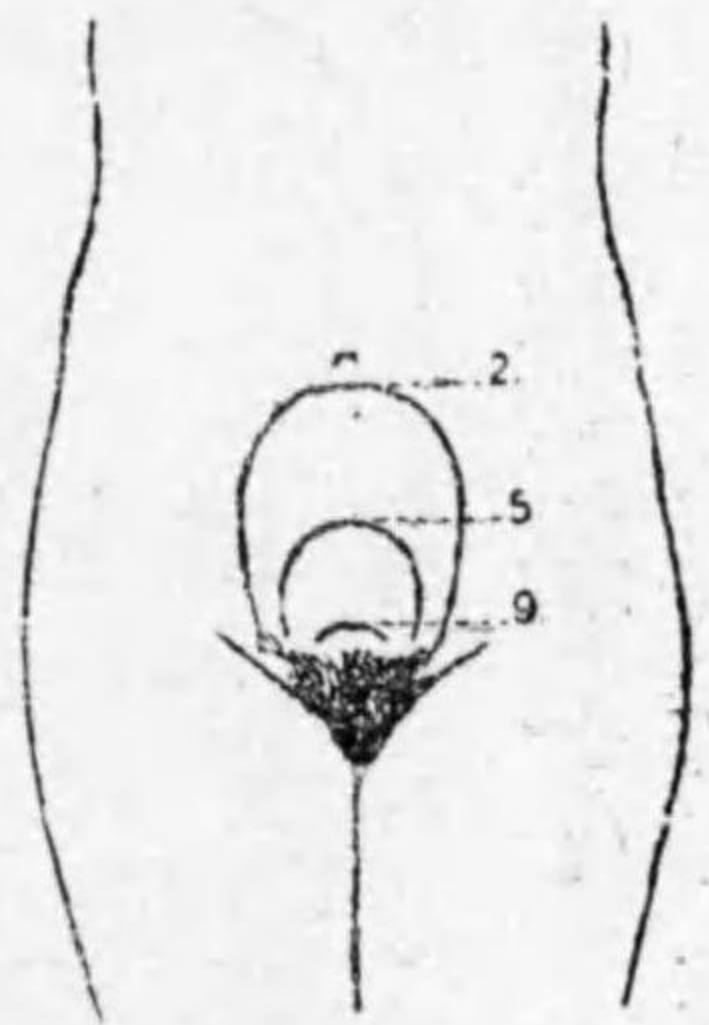
子宮體部 子宮體部は妊娠中最も大なる變化を受く、從ひて産褥期に於ける復故機能も又最も盛にして、胎兒排出の瞬間より之を明かに認むるを得。

而して其復故作用は主として筋纖維の脂肪變性による萎縮と、充血及び漿液性浸潤の減退とに基くものにして、該作用は後陣痛によりて促進せらる。

今子宮の大きさを検するに分娩直後臍下三指横徑にありし子宮底は、膀胱の充盈と骨盤底及び腔管の弛緩状態復舊とによりて、外觀上再び上昇し、産後一―二時間にして臍高に達す。

圖九百二第

下底宮子期褥產
す示を態状の降



膀胱充盈の度は宮底の高さに影響するものにして、産褥第一週の間は膀胱内の尿量百瓦を増す互に宮底一種だけ高くなる、故に宮底の高さを検査する前尿を排尿せしめ置かざれば正確を期し難し。

然れ共第二日の終りには臍下二指横徑に下り、第四日に至れば分娩直後と同高となり、第五日六日に至れば漸次下降して臍と耻骨縫際との中間にあり、第九―十日には耻骨縫際上縁の後方にあり、第十二日目には全く小骨盤内に入り、約六週を経れば原形に復す。

上記の如く速かに宮底下降するも、子宮は右の割合を以て縮少する者に非ずして、宮體前屈の度を増加するに由る。

經産婦は初産婦に比して復故機能緩慢なり。又出血、双胎、早産、産褥疾患は復舊機能を障害す。

子宮粘膜炎の復舊

子宮内面に残留せし脱落膜の上層は壊死に陥り排出せられ、深層より新らしき子宮

子宮頸部

宮粘膜炎生じ、三週後妊娠前の状態に復す。

分娩直後胎盤附着部の大きさは手掌大にして、少しく隆起し粗糙にして其表面に凝血を附着するも、次第に縮少し第二週の終りには其直徑三乃至四釐となり、第三ヶ月に至りて全く痕跡を失ふに至る。

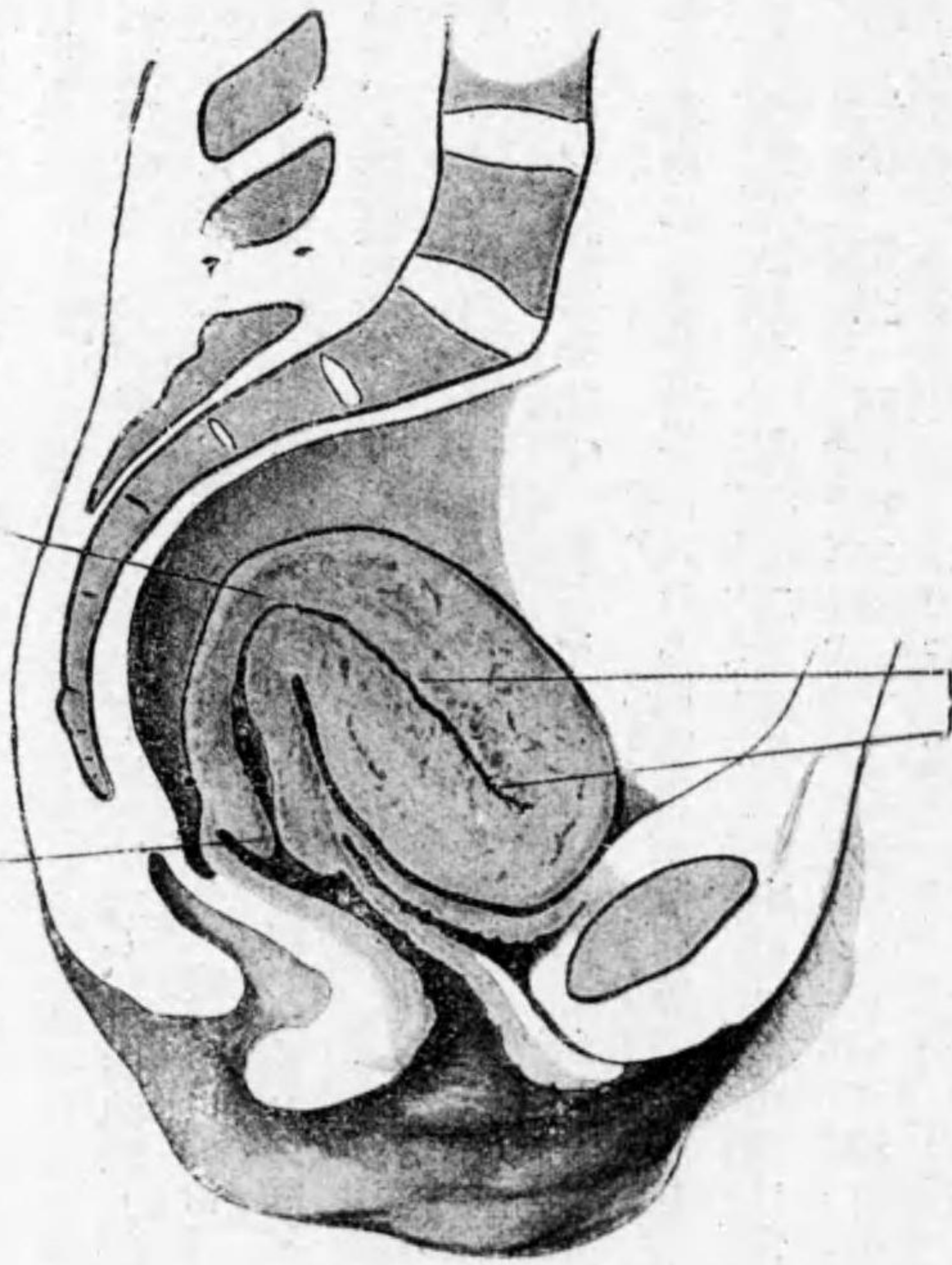
子宮下部及び子宮頸管

産褥の初期には兩者共に著しく擴大し弛緩せる管腔をなし、子宮内口部の境界不明なるも、分娩後速かに子宮内口は觸知せらるゝに至り、第三日目には既に一指を通ずるのみ、而して第十日に

胎盤附着部

圖二百十第

圖す示を態状の屈前宮子褥產



内子宮口

外子宮口

は最早や指を通ずる能わざるに至る。然りと

雖も頸管は尙廣くして第三乃至第四週に至りて漸く指を通ぜざるに至る。

子宮腔部も分娩後十二乃至二十四時間にして漸く再成せられ始め、第十日にして形状復舊す。外宮口は第三週にて漸く閉鎖す。

腔

腔 は分娩時著しく擴張するも徐々に恢復し、第三乃至第四週に至れば張力を復し、且つ皺裂を生ずるに至る。

外陰部

外陰部及び會陰 の腫脹は一晝夜位にして速に減退し、皮膚弛緩し皺裂を生ずるに至る。而して産道の下部に生じたる小なる裂傷は凡そ七日にして全く癒痕を以て治す。

腹壁

腹壁 子宮の縮少と共に其腫脹を減じ、再び皮膚は弛緩して許多の皺裂を生じ、正中線の着色も漸次減退す、妊娠線も次第に青白となり癒痕様となる。

惡露

惡露 分娩により子宮内面は一圓の創面に變ずる外、其他多數の裂傷を生ずるを以て、此等の創面より多量の分泌物を生ず、此れを總稱して惡露と云ふ。通常四乃至六週間持續排出せらる。而して其中には壊死に陥入れる脱落膜、脈落膜、卵膜片、其他剝離せる粘膜上皮細胞、粘液、赤白血球を混ず。産褥第二乃至第三日頃には尙血液に富むを以て赤色を呈す、之を血性惡露と云ひ、第三―四日後血液著しく減ずるを以て淡紅色の稀薄なる肉汁様液となる、之を漿液性惡露と稱す。七―八日後に至れば更に血液の量減じ膿球、剝離せる上皮及び粘液の之に加ふること多くなるによりて帶黃白色となる、之を白色惡露と云ふ、之より漸を遂ふて褪色す。

血性惡露

漿液性惡露

白色惡露

以上の如く惡露の血色を帶ぶるは産褥第十日頃迄なりと雖も早期離床若しくは身體の劇動によりて再び血性となることあり。

月經及排卵

而して惡露は第三週頃より順に其量を減じ、第四乃至第六週にして全く消失す、一般に授乳婦の惡露は量少なく又其持續短かし。惡露は一種の嗅氣を有するも、腐敗様の嗅氣を發することなし。

惡露の量 は各個人によりて大差あれども、産褥八日間に排泄する量は千乃至千五百瓦なり。惡露の反應 始め中性又は弱アルカリ性なれども遂に酸性に變ず。

月經及び排卵 産褥中は勿論、授乳期間中通常月經休止するも、授乳せざる婦人にては、産褥を経過すれば通常月經再び來潮す。

排卵機能は産後月經閉止に伴ひて常に休缺する者に非ずして、産後閉經せるに拘はらず排卵せらるゝことあり、故に授乳中の婦人にして未だ月經を見ざりしに既に再び妊娠せるもの尠からず。

第三章 乳汁分泌機能

乳汁分泌機能

小兒の子宮外生活初期に於ける榮養を營まんが爲、妊娠中既に乳腺大に發育を遂ぐることに前記の如し。然れども妊娠中は乳汁分泌せらるゝことなく産褥時に至り初めて其分泌作用營まる、即ち産褥第二乃至三日に至りて特に旺盛となる、其爲めに乳房は益々腫大緊張し知覺過敏となり、稀に疼痛を感じ、甚だしき時は肩胛を動す能はざるに至り、明らかに結節狀及び索狀硬結を觸る。

第三章 乳汁分泌機能

第十編 正規産褥及び其取扱法

凡て乳汁分泌機能は授乳し小児を哺乳すること多きに從ひて益盛となり、九乃至十ヶ月持續し、漸次減少し停止す。又時として二三年間分泌を持續す。從ひて乳汁分泌は一旦授乳を廢すれば速かに減退し乳房亦萎縮す。

産褥初期に排泄せらるる乳汁は、妊娠中乳房の壓搾によりて排出せらるるものと同様の者(初乳)にして、多量の鹽類を含み、初生兒に與ふれば胎糞を通利せしむるの效あり。

産褥第四日頃より通常の乳汁(眞乳)に移行す。乳汁は白色不透明にして、其比重は一〇二六—一〇三六にして、弱あるかり性、稀に中性にして、甘味を有し、其成分左の如し。

水分	八九・〇%
蛋白質	一・五
脂肪分	三・五
乳糖	六・五
鹽類	〇・一五

乳汁分泌は母體の體質、并に營養と關係を有するは勿論、多少遺傳的の關係を有す。且乳房を冷却すれば分泌量減少す、又精神、身體の過勞、消耗性疾患は其量を減少せしむ。授乳中妊娠すれば次第に乳汁の分泌量減少す。又母體血液中心に移行せる藥品、或種の黴菌、毒素(例令脚氣毒等は乳汁に移行し小児を障害す、故に母體に疾患ある時は授乳の適否につき醫師の指揮を受く可し。

月經の來潮も亦多少乳汁の性質を變化するもの、如し。

第四章 産褥の臨床的經過

全身症状 分娩後褥婦は甚だしき疲勞を感じ、屢々軽度の惡感あるも暫時にして經過し何等の障害なし、又陰部に創傷の感あることあり。分娩後少時にして褥婦は睡眠を催し、數時間にして醒覺す、其後大に爽快となり疲勞は一掃せらる。

體溫 正規産褥は無熱に經過し、體溫昇騰することなし、尤も平熱に比し産褥二週間は〇・二—〇・三度高し、然れども決して三十八度に至ることなし。故に三十八度以上に達するは明らかに病的なれば速に醫治を乞はしむ可し。

脈搏 分娩直後脈搏多少頻數となるも次第に緩徐となり、一分間六〇乃至八〇を算するに至る、時として産褥第三日頃より一層減少し一分時四十位に達するもの尠なからず。

脈搏と體溫 とは褥婦の豫後を知るに最も大切のものなれば常によく注意して檢す可し。

呼吸 も多少緩慢となり一分時一四—二〇を算し、深呼吸を營むに至る。

發汗 褥婦は容易に發汗す、殊に睡眠中に於て然り。而ふしてかゝる發汗は何等異常によるものに非ず、脈搏の緩徐と共に褥婦の經過良好なるを語るものなり。

食慾

食慾 初め一兩日は食慾減退するも次第に亢進す、殊に授乳婦に於て然りとす。發汗、惡露の排出、授乳の爲めに褥婦大に口渴を訴ふ。

便秘

便秘 秘結すること多し、此れ身體の安靜、腹壓の減少に基くものならんか。

尿利

尿利 分娩後一時尿排泄量増加すと雖も、腹壓の減少、膀胱、尿道等に於ける腫脹、分娩時に生じたる創傷に尿の浸淫する爲に感ずる疼痛により成可自利をさくること、及び仰臥位の排尿に慣れざる爲反て排尿の回数減じ、膀胱充盈するも自利をなす能はず尿閉を來し、時に尿淋瀝を來す。

體重

産褥初期の尿は其半数に於て蛋白を證明し、乳汁分泌し初むれば乳糖を其中に檢出せしむ。

體重 産褥初期には排出せし子宮内容の重量以上に體重を減少するも、第二週より再び増加し初め第三十四週頃平常に復す。

後陣痛

後陣痛 後陣痛とは産褥中に發する子宮收縮にして分娩時の陣痛と少しも異なることなし、只疼痛弱きのみなり。然れども時として(殊に經産婦)疼痛激敷して醫治を要することあり。後陣痛は通常産褥第二三日頃まで持續するものにして、發作性に來り、子宮收縮し硬固となるを以て他の疼痛と區別するを得べし。後陣痛は一般に初産婦に輕くして經産婦に強し、殊に授乳するとき、妊娠時子宮過度に擴大

初生兒の状態

第五章 初生兒の状態

せし者、若しくは子宮腔内に異物の遺殘せるときは一般に疼痛激し。

初生兒(新生兒)とは子宮内生活より子宮外生活に全く移行し終るまでの期間内に在る兒の名稱なり、其以後は哺乳兒と云ふ。

實に初生兒は此期間の間に於て、一生涯中死に亞げる大變動を身體に來す、其主なる變化次の如し。

(一) 自己の體温と同温にして而も常に溫度平等なる子宮内より、冷たく且つ溫度平均せざる外界に出づるため體温の調節を要す。

(二) 胎盤呼吸が肺呼吸に變化す。

(三) 非經口的榮養が經口的榮養に變ず。

從ひて此期間中に、此迄不用なりし臟器にして新らしく機能を初むるもの、又反對に子宮内にて有用なりし器官にして廢絶に歸するものあり。かゝる現象は急激に終了するものに非ずして、通常十二十四日にして各臟器は新生涯に適合するに至る。

呼吸 兒頭排出後直ちに第一呼吸を營み、次いで多少の間歇を置きて普通の呼吸状態に移行

呼吸

することあれども、多くは軀幹部娩出後直に高聲を放ちて號泣し此れが第一呼吸となり、かくて其後正規の呼吸運動を営むに至るものなり。此際兒は眼を開き、四肢を活潑に運動し、紫藍色の皮膚は漸次蔷薇紅色となる、而して屢々此時放尿す。

肺呼吸開始の原因は、主として分娩經過中胎兒血液内の酸素に缺乏を來し炭酸瓦斯蓄積するが爲めに、呼吸中樞刺激せらるゝによるものなるも、胎兒の受くる温熱的、器械的刺戟も又反射的に之れを補助するものなり。

尙最初娩出せし兒頭は充血するを以て、呼吸中樞の亢奮性を高め益々呼吸運動の成立を容易ならしむるものならん。

最初の呼吸は極めて淺表不整なれども第一日より第二日に亘り次第に著しく其深さを増加す。之れに由りて見るも第一呼吸にて肺胞全部完成せられざるが如し。

呼吸式は腹式にして、呼吸数は大人の二倍即ち一分間凡そ四十五回なり。

呼吸数は興奮時又は涕泣時増加し、睡眠中其数を減ず。年令の長ずるに従ひて漸次其数を減じ、生後一ヶ月にては一分間に三十五、滿一ヶ年を経れば二十五に減ず。

血行器

血行器 胎兒血行は第一呼吸によりて大變化を來し、胎盤血行停止し、肺血行成立す、即ち第一呼吸の際、胸廓擴張し、多量の血液肺血管内に注入するを以て、胎動脈の血圧は大動脈の其れよりも下降す、從ひて胎動脈より大動脈に向へる血流消失し、ボタリー氏管不用に歸す、しかのみならず同管は速かに閉塞す。次で胎靜脈より多量の血液左房に還流し、左

房の血圧頓に高まるを以て卵圓孔瓣膜は兩房中隔に押付けられ、兩房の交通全く絶たる。かくて大、小循環の區別明らかとなる。

肺臟の完成によりて胸廓内に多量の血液流入するを以て大動脈内の血圧一般に下降す、從ひて胎動脈内の血圧も又下降し、胎動脈搏動微弱となる。尙分娩後受くる温熱的刺戟(冷却)と多少の器械的刺戟により胎動脈管は收縮し胎動脈の搏動益微弱となり遂に停止す。かくして胎盤血行止みたる後と雖、暫時の間吸氣の際に胎靜脈内の血液は胸廓内に吸引せらる、然れども僅時にして胎靜脈全く萎縮す。

肺呼吸の開始と共に、アランシー氏管はボタリー氏管と同一の運命に墜る、而して分娩後二—三ヶ月にて全く閉塞す。

脈搏 分娩直後各種の刺戟により頻數なり、然れども暫時にして平常に復し第一日には一分間一二〇—一三〇なり、即ち大人の略二倍なり、呼吸數との割合は一と三の比なり。

初生兒の脈搏は容易に其數を變ず、又多少不整なる事あり。持續的に脈搏數の緩徐なるは病的なり。又一般に初生兒の血圧は大人の其れに比して低く從ひて脈搏も割合に軟なり。

體温 分娩後急に體温下降す、然れども一—三時間にして漸次上昇し初め、八乃至十二時間後三十七度に還り、尙次第に昇りて、産褥第一週間は平均體温三十七度五分を示す、早産兒

脈搏

體温

にありては下降著しく又平温に復することも遅し。
 尿 分娩後一兩日は尿量極めて少なく多少溷濁せるも次第に透明となり、乳汁攝取量の増加と共に尿量も亦漸次増加す。

時とし龜頭或は襪襪に黄色の細粉を認むることあり、殊に第一週終りに著し、是れ尿酸の排泄多量なるに由るものにして生理的なり。

排尿度数 分娩後一兩日間は排尿稀れにして、一日一―二回、多くとも三四回なるも、第三、四日頃より頻數となり少くとも一日に六―八回排尿す。

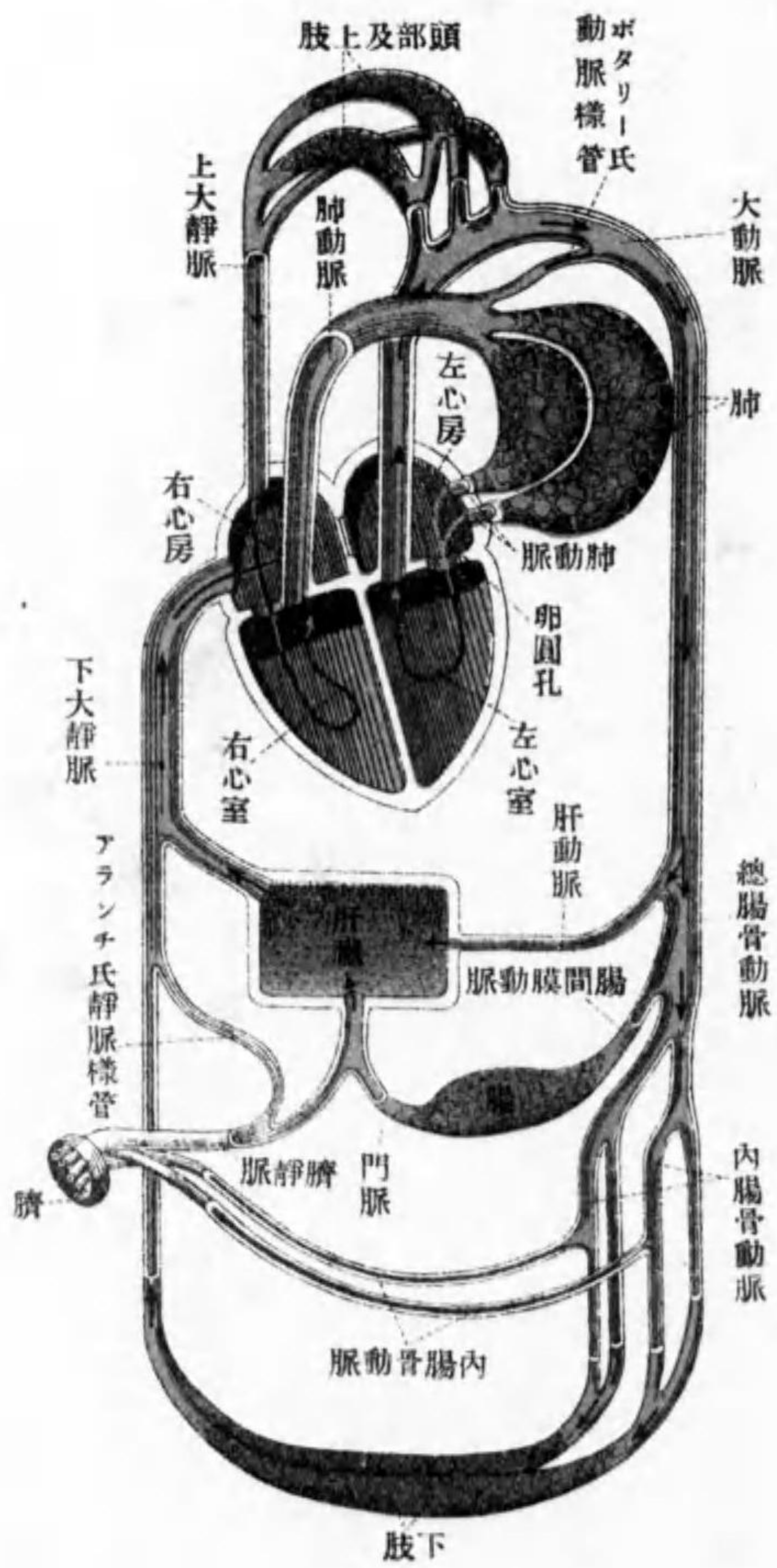
排便 分娩後一兩日間に排泄せらるゝ便を胎便(胎糞)と云ふ、無臭濃綠色粘稠の軟便にして分泌量六〇―九〇瓦なり。通常分娩後一時間以内に初行ありて、一日一―三行位にして二―四日にして全部排泄せらる。

胎便の綠色を呈するは胆汁成分を含有せるに由る、而して胎便は羊水と共に吸引せられたる剝脱表皮細胞、毳毛及び腸管上皮、胆汁色素、脂肪小球等より成る。

母乳を以て養はれたる者に在りては生後二―四日にして漸次大便は黄金色となり、軟膏様の硬度を有し、同質にして稍酸性の芳香臭を有する所謂乳便に變ず。

尤も其初期は粘液を含むこと多く水分に富み多少粘稠なるも胎便の如く著しからず、褐色乃至緑褐色を呈し屢々氣胞又は黄色絮物を含み酸性を帶ぶ、この時期に於ける大便を特に移行便と云ふ。

第二百一十圖 分娩後初生児血行の圖



牛乳等を以て人工營養を成せる初生兒の便は一般に硬度固く、色薄く強き刺戟性臭氣を有し「アルカリ」性反應を呈す。

體重

初生兒の便通は第一週は一日二―四行なるも其の後は一日二行となる。

體重 分娩後三―四日間は排泄旺盛なるに不拘營養物の攝取不充分なるを以て、生理的に約二〇〇乃至二五〇瓦體重を減す。然れども爾後次第に増加し母乳營養の初生兒は第八乃至第十日にして分娩直後の體重に復す、人工營養兒にありては快復に一層永き時日を要す。

體重増加の割合 左の如し

一ヶ月即ち第四週迄では	毎日	廿瓦
四ヶ月までは	同	廿―二五瓦
五ヶ月より九ヶ月までは	同	一〇―一五瓦
十ヶ月より十二ヶ月までは	同	六―一〇瓦
従ひて		
一ヶ月の終りには體重		四〇〇〇瓦
四ヶ月の終り		娩出時の二倍
一ヶ年の終り		娩出時の三倍となる

體重算出法

滿一ヶ年迄での小兒の體重は次の式にて算出し得可し(平井博士)

初生兒黃疸

3000 + 30 × 月數 × (28 - 月數)

初生兒黃疸 健康なる初生兒の七〇―八〇%は分娩後第二―三日にして黃疸様着色を來し第五―第七日に消失す。其着色の程度は種々なりと雖も顔面、軀幹上部に來ること最も多く、次で上肢及び腹部にも現はる。甚だしき者に限り眼結膜に表はる、此れ大人の黃疸と大に異るところなり。而してかゝる黃疸は殆んど生理的にして意に介するの要なし、早産兒には之を來すこと重し。

皮膚

兒斑

皮膚 成熟兒にありては背部及び四肢の屈曲側にのみ胎脂殘留附着す。此れを拭ひ去れば蔷薇紅色を呈せる柔軟なる皮膚を表はす。寒冷により一層著しく赤色となる。分娩後三、四日より五、六日迄の間に皮膚表皮は糠狀又は膜狀をなして剝離す、大なる膜狀をなして(殊に手掌、足趾より)剝離するは病的なり。

兒斑

我國初生兒の大多數に認めらる、皮膚の青班にして、通常臀部に現るゝも、時として肩胛部背部に認めらる、其形は圓形又は橢圓形、時として不規則なる地圖狀をなす。其大きさは種々にして、數厘乃至三厘の直径を有す。兒斑は分娩直後甚だ不明瞭なるも生後一週日に至りて著明となるもの多し、而して年を経るに従ひて漸次退色し、六七歳(第二生齒期)の頃に至りて全く消失す。兒斑は本邦、支那、朝鮮、馬來、布哇及び北米土人に屢來るものなるを以て蒙古人斑と稱せらるゝも、白哲人種に於ても微に之れを證明し得ることあり。

乳房

分娩後三―四日目に初生兒乳房屢々腫脹す、殊に男兒に多し、之を壓搾すれば白色初乳様分

乳房

臍帯脱落

分泌物を出だす之れを糜乳と云ふ。第十日頃乳房の腫脹極度に達し其後次第に減退す。
臍帯脱落 臍帯の残部は次第に日を経るに従ひて乾燥し、通常五、六日にして自ら脱落す、其附着部に小なる肉芽面を遺すも、第十二乃至十四日に至れば癩痕を形成し萎縮し、上皮を以て被はれて治癒す。又臍動脈の腹腔内にある部収縮するを以て内方に陥没して臍窩を作る。健康なる小児にては臍帯の脱落速なるも、早産兒又は病兒にては遅延するもの多し。
頭部 産瘤は一兩日にして全く消失し、分娩による頭部の變形も又去る、大顛門は一ヶ年末に至りて初めて閉す。

頭部

頭部皮膚の肝腺、皮脂腺の分泌は常に旺盛なり。

號泣

號泣 健康なる兒は高聲を放ちて強く號泣するも永く持續するものに非ず。尤も襁褓が大小便にて濕潤するか、或は餓を覺ゆる時は涕泣す、若し哺乳し、襁褓乾燥せるに不拘持續的に號泣することあれば注意を要す。

睡眠

早産兒又は纖弱なる初生兒は弱き聲を以て持續的に泣くを特徴とす。
睡眠 初生兒は睡眠を欲すること甚だしく、分娩後直に睡眠し、襁褓濕潤するか、餓を覺ゆるに非らざれば醒めず、覺醒時乳頭を含ましむれば強く吸引し哺乳す、從ひて兒が漸次發育し乳汁の需要増加すると共に睡眠すること少なくなるも、早産兒にして哺乳不充分なる兒は

益々長く睡眠し、いよ／＼少くなく哺乳す。

消化器

消化器 初生兒は盛んに哺乳すれども、初生兒の胃の發育は未だ充分ならざるを以て大量を容る、能はず、今初生兒の胃の大きさを見るに、

生後第一日	平均約	四〇—四五珄
一ヶ月の終り		九〇・〇珄
二ヶ月の終り		一〇〇・〇珄
三ヶ月の終り		一一〇・〇珄
四ヶ月の終り		一二五・〇珄
五ヶ月の終り		一四〇・〇珄
六ヶ月の終り		一六〇・〇珄
七ヶ月の終り		一八〇・〇珄
八ヶ月の終り		二〇〇・〇珄
九ヶ月の終り		二二五・〇珄
十ヶ月の終り		二五〇・〇珄
十一ヶ月の終り		二七五・〇珄
十二ヶ月の終り		二九〇・〇珄

其形も大人と異りて胃底及び幽門部の發育弱く、胃は寧ろ垂直に近きを以て容易に乳汁を吐出す。胃に於ける消化液は大人と異ることなく分泌せらるゝも、其量少なきを以て消化力少なし、殊に蛋

白質の消化作用微弱なり。而して哺乳後母乳なれば三時間、牛乳は四時間にして胃は全く空虚となる。唾液の分泌は非常に少量なり。腸に於ける消化作用は略大人に於けると大差なく、之に附屬せる消化腺より分泌せらるる醱酵素、刺戟素は已に全部存在し、充分なる消化作用を營む。腺液の糖化作用は第四週後初めて生ずるもの、如し。

神経、五臓器

初生兒の脳神経系統は凡て未だ機能不全なり。然れども凡ての反射機能は著しく發達す。而して初生兒の哺乳運動、嚥下運動、四肢の運動、眼の運動は凡て之れ先天性の反射運動に過ぎず。要するに初生兒は正にウィルヒヤウ氏の云へるが如く一個の反射器械に比す可し。漸次之れ等の構造完備するに従ひ隨意運動も發達す。

五臓器中、味神、觸神、嗅神は既に之を備ふるも、胎内にありては聽神を全く缺除す、然れども生下第一日既に強き音響に對して反應す。

視神 生後一週間は僅かに明暗の別あるに過ぎず、一ヶ月にして漸く光輝ある明らかなる物體及び色を識別するもの、如し、而して初生兒は遠視なり。

此等發育不全の五臓器は生後三―四ヶ月にして漸く完全に作用するに至る。

第六章 褥婦の取扱法

褥婦の取扱法

褥婦は患者に非ざるも健康婦人よりも容易に重篤の疾患に犯され易きを以て、適當なる看護を要す。

を要す。

褥婦看護の目的

は妊娠、分娩によりて變化せる身體並に生殖器の恢復を催進し、創傷傳染を防ぐにあり。

褥婦の診察

産婆は産褥第一週間は毎日午前、午後各一回(少なくとも一日に一回)、褥婦を訪問すべし、第二週は毎日一回往診す。勿論往診の繼續長短は病變の有無、産家希望の如何によりて大に異なる。

訪問時間診によりて、褥婦の自覺症狀、出血の多少、通利、疼痛、乳汁分泌の狀態、發汗、睡眠狀態、口渴等を尋ね、初生兒の處置を先にし、褥婦の診察を後にすべし。

褥婦の診察は次の順序に由るべし、即ち第一に體溫、脈搏を検し、次で乳房を診察す(必ず外陰部の處置よりも前に行ふべし)、然る後外診によりて子宮の收縮狀態を検し、次に外陰部に壓抵せる綿花に附着せる惡露の性状出血の程度を見、最後に外陰部の異常を検すべし。斯の如くにして異常の存するあれば直ちに醫治を乞はしむべし。

今褥婦の攝生及び處置に付き重なるものを擧ぐれば左の如し。

居室 産室の條下に述べたるに同じ。

安靜 褥婦は身神の安靜を要す。安靜は全産褥期間を通じて最も必要なる條件なり。

居室 靜養

凡て褥婦は頗る精神過敏なるものなれば、精神神経の興奮を避け、他人の訪問を可成拒絶し、居室内には醫師、産婆、看護婦の外濫りに出入せしむべからず、若し之れを許すことあるも長座せしむべからず。

分娩時の過勞により、褥婦は疲勞し暫時の間絶對的安靜を要望するものなり、故に分娩後十二二十四時間は特に必要なる操作を禁じて睡眠を妨げざる様努むべし。

生來壯健なる人にも産後八―九日間は静臥せしむ、最初の二―三日間は背臥位を取らしめ、第四日頃より側臥位を許し、暫時床上に起坐せしむ、第二―第三週より離床を許す。戶外散歩は第三―第四週後になさしめ、入浴も此頃に初むべし。第六週頃より平生慣れたる業務に就かしむるを規則とす。長途の旅行階段の昇降を許すも亦此頃なりとす。虚弱なる褥婦には一層長時間の静臥を命す。

要之、就褥期の長短は子宮狀縮状態及び惡露の量に鑑みて定むべし。餘り早期に離床せしめ或は身體を甚しく動搖すれば内生殖器の變位、殊に子宮及び膈の下垂脱出を起し、時としては怖るべき出血、のみならず血栓の剝離によりて危険なる症状を起すことあり。

早期離床

褥婦の早期離床 近時健康なる褥婦には早期に起座又は離床を命ずるものあり、之れを適當に行へば反て復故作用を速かならしめ、褥婦の營養恢復も速かにして利する處多く、其爲に障害を蒙る事少しと雖も、之れは醫師の指揮の下に行ふべきものにして、一旦其適應並びに方法宜敷を得ざれば甚だ危険なるものなれば、産婆は其適否を決定し得べきものに非ず。又早期離床は早期勞働の弊を醸す虞れあるを以て産婆自ら之れを許容すべからず。

局所の清潔

局所の清潔 産褥初期は惡露の排泄多量なるを以て、消毒せる綿花數枚を重ね其上を綿紗を以て被ひたる壓抵布を外陰部に當て、丁字帶を以て固定し、衣服、寢具等の不潔となるを防止、且外部よりの傳染を防ぐべし。

壓抵布の交換時間は排泄量の多少によりて長短種々なるも、外面まで濕潤せざる前に之れを替へざるべからず、即ち毎二―三時毎に新らしきものと取替ふべし。壓抵布と丁字帶との間に油紙を挿入する時は惡露多量に分泌するも褥婦の衣服を汚染すること少かるべし。

産褥第一週には毎日二―三回宛外陰部を稀薄なる消毒液(二%石炭酸、一%リゾール、三%硼酸)を以て洗滌清拭し、創傷あらば沃度フォーム、デルマトールを散布し、其上に壓抵布を置くべし、

兩便後外陰部を同様處置するを良とす。

腔内の洗滌は行ふを要せず、却て傳染の危険あるを以て醫師の命ある外漫に之を行ふべからず。

全身の清潔 一般に褥婦は甚だしく發汗し、且惡露等の排泄あるを以て不潔となり易きも、前述の如く沐浴する能ざるを以て、襯衣は度々乾燥せる洗濯すみのものと取替へ、一日一

全身の清潔

飲食物

二回微温湯にて手拭を搾り褥婦の身體を足部に至るまで悉く拭ふべし。沐浴は第四週目より許容せらる、座浴は第二週以後に行ふも可なり。飲食物 褥婦は授乳せざる可からざるを以て、平素よりも滋養價に富める食料を供給するを要す、又褥婦は身體の運動不足なるを以て成るべく消化し易き者ならざるべからず、殊に産褥第三日に至るまで成可流動性食物(牛乳、鶏卵、肉汁、重湯、葛湯、淡粥等)を與へ、第四日後に至り、便通あり食欲増進せば徐々に消化し易き固形物(パン、軟肉、刺身)を與へ、第二週より平食に移るを通則とす。褥婦を飢渴に陥らしむべからず、又反對に飽食を恣にするべからず、常に其適所にあらざるべからず。飲料として清水麥湯等を用ふ、稀薄なる茶、珈琲は可なりと雖も産褥初期には酒精飲料を禁ずべし。

便通

便通 産褥第三日頃まで通常便通なし、然れども第四日に至り尙便意を催さざるときは、グリスリン、石鹼水、又は微温湯にて洗腸せざるべからず。其後も毎日又は隔日位に通利ありしむべし。されど度々洗腸を行へば直腸過度に擴張し、甚だしきは粘膜損傷を來たす怖れあり、故にかゝる場合には醫師の指揮を求むべし。大なる痔核を有するもの、腔、會陰破裂等を有するものに於ても又同じ。

尿利

尿利 褥婦が屢々尿閉を來すことは前述せり。而して膀胱の充盈は復故作用を障碍するを以て分娩後六時間を経て自力せざれば膀胱部の摩擦、壓迫、濕温瘧法を施して尿排泄を企つべし。尙効なきものにして身體に異常なく、子宮收縮良好なるものは靜かに床上に蹲踞せしめて放尿を試みるも可なりと雖も此際努責せしむべからず。かくて尙排尿せず二十四時間を經過するときは嚴重に消毒せる「カテーテル」を以て導尿すべし。

カテーテル挿入により屢々膀胱加答兒を誘起す、殊に産褥時に於て然り。故に消毒は彌が上にも嚴重に行ふべし、且止むを得ざる場合の外漫りに行ふべきに非らず、導尿の際はカテーテルのみならず褥婦の外陰部並に諸姉の手指の消毒に注意すべし。

衣服

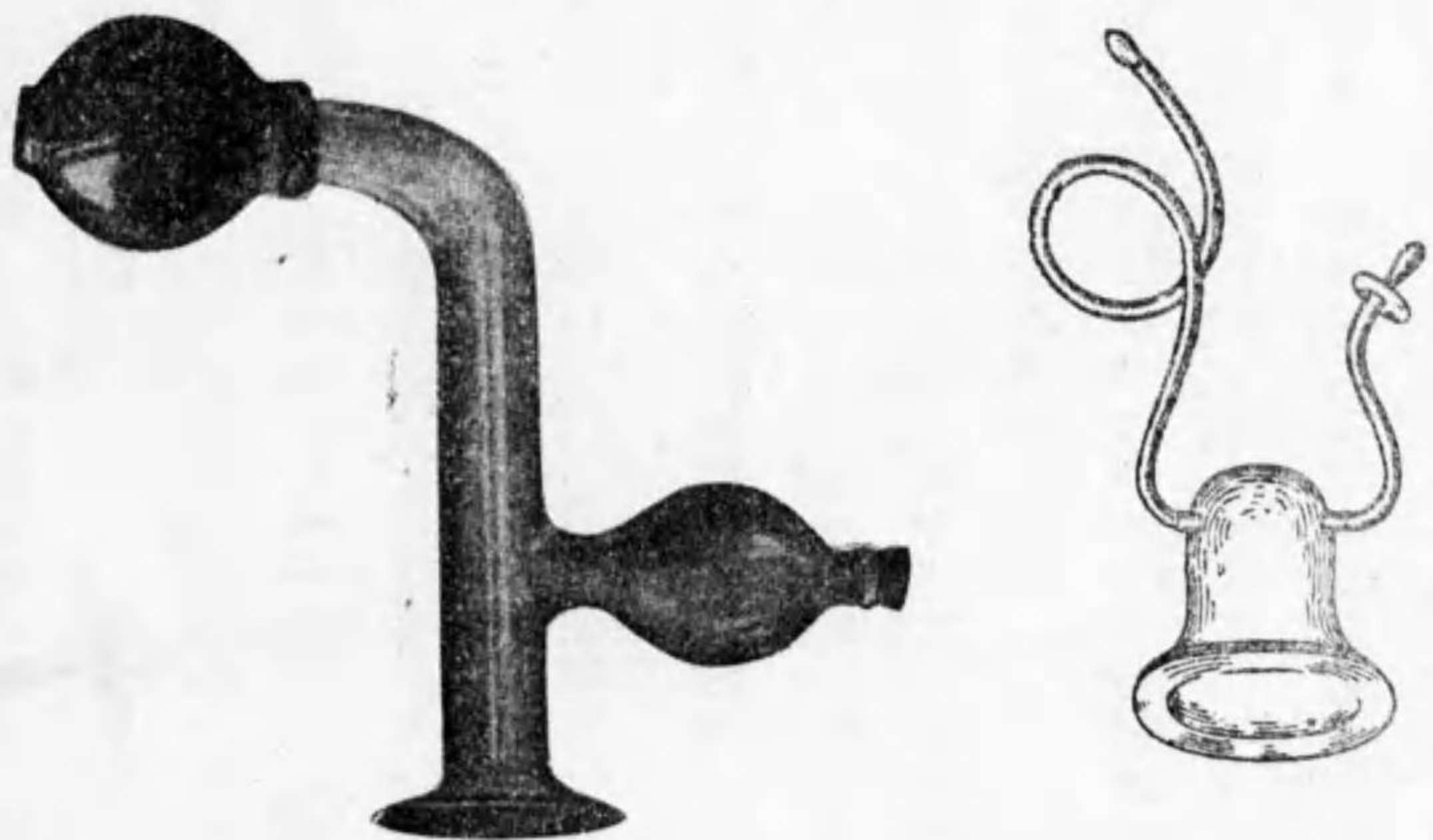
衣服 衣服は寛かにして軽く温かきものを撰ぶべし、殊に乳房及び腹部の冷へざる様注意すべし。發汗の爲甚しく濕潤せる襯衣は取替を要するも、産褥第一週は可成身體の動搖を避けざる可からざるを以て、若し發汗あらば其都度乾布を以て之れを拭ひ、又惡露等によりて衣類の汚染せらるゝを防がざるべからず。寢具も清潔にして軽く温暖なるべし、之れが汚染をさくる爲に、方三尺位の護謨布又は油紙を臀下に敷き、其上を敷布を以て被ふべし。

腹帯は産褥期に於ても大に必要なるものにして、之れによりて腹壁の弛緩、直腹筋の離解を防ぎ、内臓の下垂を豫防するに適當なる者なれば、六―八週間之を帯びざるべからず。

第二百二十圖

乳汁吸引器

(一其) (二其)

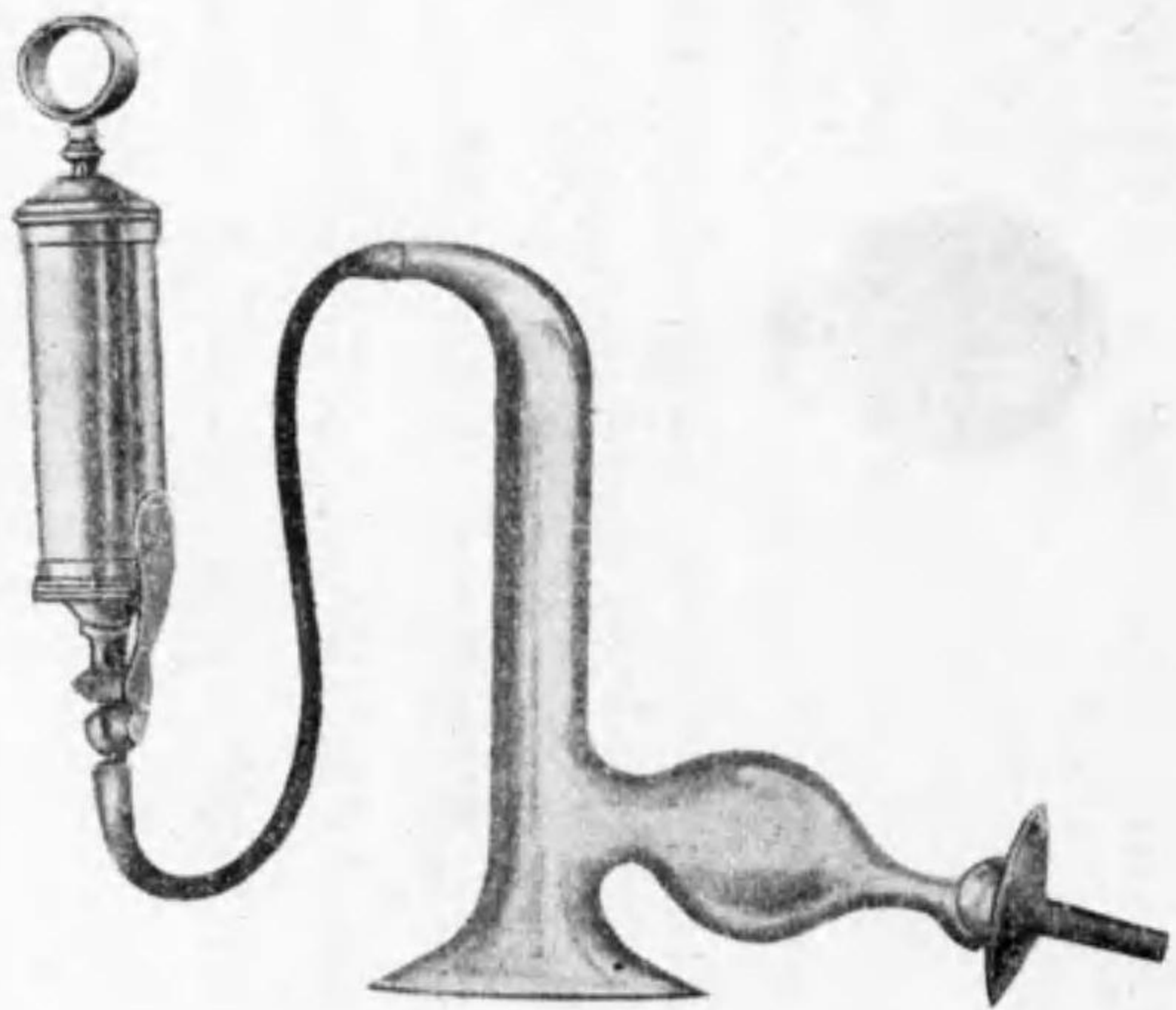


強劇なる後陣痛の處置 後陣痛の強劇なるは屢々子宮内に血塊の残留するに因る、故にかゝる時は先づ靜かに子宮を摩擦し之れを壓迫して凝血の排出を試みるべし、尙疼痛強きものは微温濕巻法を施して緩解を計るべし。

乳房の處置 授乳の前後乳嘴を二% 硼酸水、或はアルコール、又は清水にて清拭すべし。決して不潔なる手指を以て之れに觸るべからず。否らざれば母兒に不側の障害を招く事有り。乳嘴扁平なるか又は陥凹せる時は指を以て之れを牽抽し、ゴム輪にて固定するか若しくは乳汁吸引器を用ひ

て吸引しやすからしむる様引出すべし。

(三其) ヌシケ氏吸引器



る事あり、かゝる時は便通を佳良ならしめ、飲食物の量を節し、乳房の表面に綿布を貼し綿帯にて提舉し之れを壓迫すれば自然に緩解す。此際乳汁を搾り出せば一時緩解するも其後却て再び緊満す。又温巻法を施せば乳汁の吸収を促し多少緩解す、且又氷巻法を施せば乳汁分泌の減少を來す。

乳汁分泌過少なる時は多量の滋養食をあたへ身神を安靜にし、且哺乳を廢することなく絶えず乳兒に含ましめ、乳頭を吸引刺戟せしむるか、或は吸引器にて排泄を試むることを怠るべからず、又時々乳房の「マツサージ」を行ふも可なり。

授乳せざる者若しくは乳汁の分泌甚だしく旺盛なる爲めに乳房緊満し、疼痛のみならず輕熱さへ發す

授乳 (小兒看護篇を見よ)

第七章 初生児の看護及び榮養法

第一節 初生児看護法

初生児看護法

分娩直後に於ける初生児處置法は已に分娩篇に論述せるが如し、其後の初生児看護法中注意すべき諸點を以下述べんとす。

一、**身體清潔法** 初生児身體の清潔は其發育に至大の關係を有するを以て、毎日一回、成るべく午前中に沐浴せしむべし、之れに由りて身體を清潔ならしむるのみならず、之れを溫暖ならしめ、生活機能を活潑ならしむる作用あるを以て、生後三ヶ月間毎日沐浴を行ふべし。

其方法は分娩直後の處置篇に述べたり。

産褥の初期には産婆自から沐浴を爲し、褥婦の離褥する頃に至らば其方法並に其他注意事項を精細懇切に示教して家人に行はしむべし。

沐浴は風の流通せざる室にて行ふ可し、冬季に於ては殊に然りとす。

沐浴中臍帶を牽引せざる様注意すべし。

早産児の沐浴は醫師監督の下に行ふべし、之れ沐浴中時として危険を來すことあればなり。

小兒咳嗽せるとき、皮膚に腫瘍を生ぜるとき、臀部、股間に糜爛を生じたるときは沐浴を見合せ醫師

に相談すべし。

初生児の臀部、外陰部は濕潤のために犯され易きを以て衣服、襁褓が尿、便の爲めに汚染すれば速かに之れを交換し、且其度毎に毎回丁寧に清拭し亞鉛華澱粉を撒布すべし。かくしても尙糜爛を生ぜば、ラノリン或はワゼリン塗布す可し。

二、臍帶斷端の處置 臍帶斷端を乾燥せしめ、且不潔物に接觸せしめざる様になし傳染を防ぐべし、即ち毎回入浴後初湯のときと同様に處置せざるべからず、若し尿管等にて汚染せられし疑あれば、「アルコール」にて清拭し繃帶を新たにすべし。

臍帶の乾燥不充充分なるときには、一—二%サリチル酸澱粉、デルマトール、キセロフォルム等を撒布すべし。

臍帶脱落後數日間は肉芽面を露出せるを以て同様に處置すべし。

三、小兒の衣服 氣候の寒暑によりて差あれども、凡て初生児皮膚の分泌は旺盛なるを以て厚着せしめて餘り溫暖に過ぐべからず、大人よりも多少温かき位にて充充分なり。古來我が國には初生児に厚着せしむる習慣あり、これが爲め反つて皮膚を纖弱ならしめ分泌過多の爲に發疹を來さしむ。

小兒の身體は盛んに發育する者なれば衣服を可成寛濶になし之れを以て緊縛すべからず、卷

臍帶斷端の處置

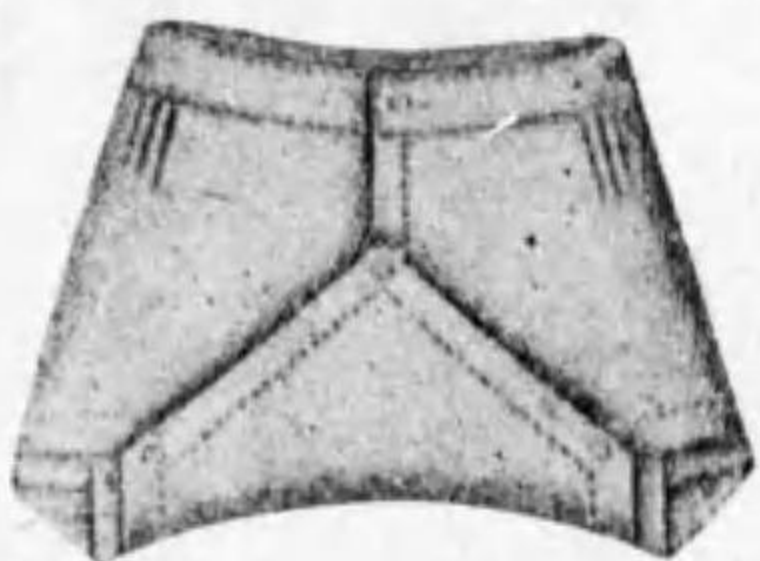
小兒の衣服

襪

蒲團の中に包み込むは宜しからず、外出する時の外小兒を被包せざるを良とす。衣服は毎日交換すべし殊に尿尿にて汚染せらるゝときは其都度取代ふべし。襪は清潔にして柔軟なる布片にて作るべし。我が國古來の習慣により古き衣服の解きたるものを用ふる時は、前以て之を充分清潔に洗濯し、成べく一度消毒して用ふべし、かくせば新らしき布片を用ふるよりも却て水分の吸収よく工合宜し。新らしき布片を用ふるときにも豫め洗濯して之に附せる澱粉、晒粉、色素等を除かざるべからず。

圖三十百二第

圖の襪襪るふ用てに國外



我が國にては通例長方形の襪襪を用ふれ共、西洋にて用ふる角形の物も又便利なり、各好む所に從ひて使用を試みるべし。

居室

四、小兒の居室は大人の室よりも多少温暖（攝氏十九—二十度）なるべし、且空氣の流通宜敷、光線充分にして、盜風を防ぎ、室内乾燥せざる様水蒸氣を常に發散せしむ可し。然れども光線の強きにすぐるは不可なり。

臥床

五、小兒の臥床母と同床せしむべからず、必ず各別の臥床に入らしむべし。敷蒲團は餘りに柔軟ならざる者を選び、上蒲團は輕温なるを用ふべし。初生兒の身體は冷却し易きを以て

睡眠

夏期の外湯婆を入るべし。小兒の枕は高きに過ぐべからず、而して之れを項部に接近して挿入す。小兒は成べく側臥位を取らしむ、勿論屢臥側を變更すべし。夜具枕等は時々日光に曝すのみならず又よく洗濯して常に清潔を保たざるべからず。六、睡眠は小兒の發育上非常に必要なものなれば晝夜三—四時間毎に哺乳の爲覺醒する外安靜に睡眠せしめ之れを妨ぐべからず、夜間熟睡中は五乃至六時間哺乳せざるも可なり。

吐乳及吐逆

小兒の發育と共に睡眠持續短縮せらるゝも、一年の終りには平均十六時間、二年の終りには平均十二—三時間を以て適當なる睡眠時間とす。吐乳及び吐逆 急に乳汁を吸引するか又は授乳後身體を動搖せしむれば、初生兒は容易に乳汁を吐出するも何等の害なきものなり、然れども哺乳の中間に於て乳汁を吐出するは嘔吐にして之れと區別せざるべからず。又兒は屢吐逆をなすものなり、之れ横隔膜の痙攣なれば靜かに側臥位を取らしむるか或は直立位となして軽く脊部を打つべし。

運動及外出

運動及び外出 初生兒は氣候の許す限り一—二時間戸外に伴ふを良とす、温暖の時季に於ては分娩後一—二週間を経過すれば害なし、寒冷の候なれば三—四週間を待たざる可からず。而して外出は成る可く風なく暖かくして温度の激變少なき午後二—三時頃を撰ぶべし、夏期は午前十時—正午頃を良とす。過激なる運動は凡て害あり殊に頭部を甚だしく動搖せしむるは最も不可なり、乳母車の如きは生後

一ヶ月以内に用ひざるを可とす。
生後三四月間は身體尙薄弱にして自ら支ふる能はざるを以て床中に在らしむるも差支なければども、其以後に至れば自ら他人に抱き上げられんことを望む者なり、それに拘はらず強ひて平臥せしむる時は心身の發育上害あり。

初生兒榮養法

第二節 初生兒榮養法

初生兒（嬰兒）の哺育は母乳を以てすべし、之れ實に自然の命する所なればなり。然れ共母體に疾患を有し授乳し能はざるか、若しくは他に枉ぐべからざる事情ありて生母自ら之れに當る能はざる時は乳母を撰び養育せしむべし。斯の如く人乳によりて哺育するを天然榮養法と云ふ。天然榮養法を行ふ能はざる時は他の榮養物例へば獸乳又は穀類を以てす、之れを人工榮養法と云ふ。前記兩者を併用するを混合榮養法と云ふ。
人工榮養法よりも天然榮養法の優秀なるは今更喋々を要せざる處にして、人工榮養による兒は天然榮養兒に比して數倍の死亡率を示し、其罹病數も亦頗る多大なり、之れ人乳は兒に對して獸乳等を以て代用すべからざる特殊の優越なる諸點を有するが故なり。

天然榮養法

母乳榮養法

第一項 天然榮養法

母乳榮養法

健康なる褥婦は自から授乳せざるべからず、授乳に由り復故機能を催進するのみならず、食慾を増し、榮養を佳良ならしめ、産褥經過を短縮す。且母乳は小兒に對して最良の、而も最も適合し、最廉價の榮養品なればなり。故に母は自から授乳するを以て原則となすべし。
分娩後の疲勞恢復し乳汁分泌開始し、初生兒眠より覺め食を求むるに至れば何時にても（分娩後六―八時間なるを普通とす）授乳して可なり、然れ共時として分娩後一兩日乳汁の分泌を見ざることもあり、さる場合には白湯、番茶、一萬倍の「サツカリン」水をあたえて水分の缺乏を補充すべし。此間に於ても母乳を吸啜せしむべし。然る時は通常母乳は分泌を開始するに至る。最初分泌不充分的も忍耐して哺乳を繼續せしむべし、必ず奏效するに至らん。

かゝる場合に兒の飢餓に陥らんことを恐れ牛乳等を與ふることあるも、生兒は尙食を欲すること少きを以て其要なし。此れがために屢小兒の胃腸を害し、且兒が次第に哺乳を厭ふを以て、自然哺乳回數少くなりて、母乳の分泌益遲延するに至る。
我國にては初乳を與ふるを忌む風習ありと雖も、之に由りて胎糞の排泄促され、害なきのみならず大に利益あり、故に何等の顧慮なく之れを哺乳せしむべし。
俗間に用ふる萬久里、三藥湯、五香藥と稱する藥は皆下劑にして屢胃腸を害し、營養障害を來すとあり、初乳を用ふれば此等の藥品を用ふる必要更になし。

授乳の時間と同數 授乳に關し最も注意すべきは哺乳の時間を一定することなり、而して最

授乳の時間と同數

も大切なるは生後第一週に於て此規律ある習慣を涵養すべきなり。此れは身體の發育上至大の關係を有するものにして、小兒の啼泣する毎に（必ずしも飢餓を訴ふる時にのみ啼泣するものに非らず）哺乳せしめば不規則なる習慣を作るのみならず、胃腸を害すること屢なり。哺乳回数（小兒の強弱によりて一様ならずと雖も、健康なる兒にありては朝六―七時より夜十時に至る間は毎三時間毎に縦令睡眠中と雖も時至らば哺乳せしむべし。夜間は四―五時間毎に一回とし可成啼泣し食を求むるに非らざれば與へざるを良とす。而して漸次夜中の哺乳を廢するの習慣に遷らしむべし。斯して初七回なりし一日の授乳回数を後には五―六回となすべし。哺乳力弱き兒にありては毎二時間毎に少量宛與ふるを良とす。哺乳の持續 一回の哺乳に要する時間は分泌量多く乳兒の哺乳力強き時は十五分乃至二十分にて足れり。兒既に満腹すれば自ら乳頭を捨て或は之れを強いて放たしむるも敢て號泣することなく又四肢を運動することなくして安靜に歸するを以て哺乳充分なりや否やは容易に知らる。

授乳量

授乳量 分娩第一日の哺乳量は極めて少量なれ共漸次第二日より増量す、今平均哺乳量を示せば左の如し。

一回量(瓦) 授乳回数 一日の哺乳重量(瓦)

第一日	四―五	一―二	一〇以内
第二日	八―一〇	四―六	六〇
第三日	二〇	七	一八〇
第四日	三〇	七	二二〇
第五日	四〇	七	二八〇
第六日	五〇	七	三五〇
第七日	六〇	七	四二〇

第二週には六〇―九〇を與へ、其後次第に増加すべし。

我國乳兒の第一ヶ月以後に於ける一日の哺乳量は平井博士によれば左の如し。

滿一ヶ月	六四〇・〇グラム
同一ヶ月	七八〇・〇グラム
同一ヶ月	八二一・〇グラム
同一ヶ月	八三八・〇グラム
同一ヶ月	八八三・〇グラム
同一ヶ月	九〇四・〇グラム

ツエルニー及びケルラー氏の調査に據れば體重と一日の哺乳量との比較左の如し。

體重の倍数

1/5

第一週以後

第二ヶ月

1/6

第五ヶ月

1/7

第六ヶ月の末

1/8

以下順次

1/9 となる

母體乳房は一日に二〇〇〇〇瓦の乳汁を排泄するを得るものなり。

授乳の方法

授乳の方法

分娩後一週間は褥婦尙安静を要するを以て側臥位にて授乳すべし、其後起座するを得るに至らば夜間睡眠中と雖も起座して授乳すべし、横臥して授乳する時は睡氣を催し往々過ちて乳房を以て小兒の鼻口を壓迫し窒息せしむ。

授乳に先ちて豫め清潔なる布片に清水或はアルコール又は二―三%の硼酸水を浸し乳頭、乳暈及び其周圍を能く拭ひたる後、清拭したる手の示指と中指とを以て乳頭を摘み、其指にて乳房を壓し乳を搾り出す様にして、小兒の口内に含ましむべし、此の際乳房を以て小兒の鼻孔を閉塞せざる様注意すべし。

若し小兒哺乳せざる時は指頭を以て兒の下顎を軽く下方に押して其口を開き、乳頭を含ましめたる後、乳房を壓搾して乳汁の二三滴を舌上に滴下せしむれば哺乳するに至る。

一回の授乳には通常一側の乳房にて充分なれば、常に左右交代に與ふべし、兩側を含ましめ各々其半量宛を授乳せしむるが如きことをなせば次第に乳汁分泌量の減少を見るに至らん。

小兒口腔内の清潔法

小兒口腔内の清潔法

清潔なる手指に微温湯又は硼酸水を浸したる脱脂綿を捲き付け哺乳の前後に小兒口腔内を軽く清拭すべし、然らざれば口内に残れる乳汁の變化によりて口内疾病を起し、爲めに哺乳困難となるのみならず遂に胃腸を害するに至る。

嬰兒に護謨製乳頭を含ましむるは、口内の不潔を招き易く、且悪習慣に導くの怖れあるを以て之れを禁すべし。

授乳禁忌症

授乳を禁止すべき場合

授乳によりて母體の健康を害するか、又は小兒の健康を障害する怖ある時、或は小兒哺乳困難にして殆ど不可能なれば哺乳を禁止す、即ち母體の結核症、骨軟化症、腎臓病、癩病、急性熱性病、脚氣等の時は授乳を禁す。勿論授乳を禁止せんとする場合には必ず醫師の指揮を待つべし。

母脚氣に犯さるゝも常に廢乳せしむる必要なし殊に輕症の脚氣に於て然り、され共兒に乳兒脚氣の症状(身神不安、啼泣、吐乳、不消化便、脈搏の頻數微弱等)を呈するものは直ちに廢乳せしむべし。母體の乳腺炎、兒の狼咽、兔唇、鼻加答兒により哺乳困難にして授乳を廢止せざる可からざることあり。

母體に微毒を有する時は、兒も通常先天性微毒の徴候を有するを以て自から授乳すべし、乳母に託すべからず。

授乳中に月経現はれ又は妊娠することあるも母兒に障害なき限り直ちに廢乳するに及ばず、然れ共一旦母兒の營養障害又は流産の徴あれば直ちに斷乳すべし。

然るに近來以上の適應症なくして授乳するを欲せざるもの多し、保健上大に戒むべきことなれば、産婆たるものは其利害得失を充分に説明し自ら授乳せしむる様なきざる可からず。

乳母の撰定

乳母の撰定

生母自から授乳し能はざる時には乳母をして小兒を養育せしむべし。乳母の撰定は醫師の行ふべきものなりと雖も産婆も又母乳の資格に關し一定の智識を備ふるを要す。

乳母は二十一三十歳の體格營養共に佳良にして結核、精神病等の遺傳を證明せず、又現に黴毒、淋疾、軟性下疳、結核、癩病、脚氣、癩癩、精神病、其他トラホーム等の傳染性疾患を患へず、慢性皮膚病殊に乳房の附近に濕疹を有せざる婦人たるべし。且性質は可成温順にして、よく秩序を守る經産婦を選べし。蓋し經産婦なれば初産の際乳量多かりしや否やを知るを得べく、且乳母の疾病を推定するを得、又授乳法等に付多少の經驗を有するを以てなり。乳母は生母と同じ頃に分娩せる者なるか或は生母の分娩より一二月早きものなれば可なり、但し分娩後未だ二週日に至らずして生殖器の復故作用不十分なるは不良なり。

乳母の乳房は能く發育し、乳頭突出し哺乳に適し、乳汁の分泌量多くして、壓搾する時乳汁射出する程の者ならざるべからず。而して乳汁の一滴を手指の爪上に滴下し、指を軽く振盪するも其點下せる時の原形を失はざるものは概ね良とす、されども甚だしく白色を呈せるは脂肪過多なりと知るべし。

乳母の攝生 茲に注意すべきは、乳母の生活法を急變すべからず、平生よりも多少蛋白質に富める習慣性食物と、多量の飲料を給すれば充分なり。脂肪多きものは却つて乳汁分泌量を減退せしむ。

而して平素の慣れたる業務を取り、新鮮なる外氣中にて適當の運動を營ましめ、便通を能くして、起臥飲食等規律を守らしめ、不攝生を禁ぜざるべからず。

離乳

離乳

生後一定の時期に達すれば乳兒は哺乳を好まず、反つて周圍の人々の食するものを渴望するに至る。而して嬰兒生長せるに不拘何時迄も哺乳せしむる時は乳兒の發育不良(心身共に)となり、皮膚は蒼白にして弛緩し骨の發達を障害す。故に此の時期に達せば猶豫なく離乳せしむべし。離乳の時期に付きては乳兒發育の遲速身體の強弱によりて一定せざれども産後十ヶ月位にて可なり。

離乳の方法 離乳を突然行ふは害あり漸次行ふを要す、即ち八ヶ月に至れば授乳の回數を減じ牛乳、重湯或はミルクフード等を以て不足を補ひ、新榮養品に慣れしめ、液狀物より半流動食となし、終に固形食を與ふ可し、魚肉を與ふるは生後一ケ年半以後にすべし。

人工榮養法

第二項 人工榮養法

乳兒榮養に關し天然榮養法の理想的なるは今更論するを要せずと雖も、萬止むなき事情の爲之を行ひ難き時には人工榮養法を行ふ。前述せる如く人工榮養法は天然榮養法に比して大いに遜色あれども其方法に宜敷を得ば又相當の効果を擧ぐるを得。

人工榮養は主として獸乳を用ひ、稀れに其製品を用ふ。獸乳中人乳に最も類似せるは驢馬の乳にして、此を用ふる時は殆ど稀釋調合するの要なく、又乳房結核は稀有なるを以て採乳宜敷を得ば殆んど消毒する必要なし、然れ共容易に得難きを以て通常牛乳を用ふ。

成分	種類			
	人乳	驢馬乳	山羊乳	牛乳
蛋白質	一・三%	一・六%	三・六%	三・五%
脂肪	四・〇"	三・九"	四・五"	三・七"
糖分	六・五"	五・六"	四・一"	四・六"
鹽類	〇・二"	〇・三六"	〇・八"	〇・七"

牛乳榮養法

牛乳榮養法
人乳と牛乳との差異

牛乳と人乳との差異 (イ) 前表にて知るが如く牛乳は人乳に比して蛋白質及び鹽類に富み、糖分に乏し。(ロ) 牛乳の蛋白質は人乳の其れに比して、胃液によりて硬く凝固す、従ひて消化困難なり。(ハ) 脂肪含有量は兩者同一なれ共、牛乳の脂肪は人乳の脂肪に比して消化し難し。(ニ) 尙人乳は乳頭より直接哺乳せらるゝを以て殆ど無菌なり、然れ共牛乳には多數の細菌を混入す。(ホ) 其他兩者間に生物學的の差異あり。

牛乳の稀釋法

牛乳の撰擇 健康なる非結核性牛を乾燥せる飼草藁等を以て飼育せるものより得たる牛乳最も良し、綠草或は不純の飼料を以て養はれたる牛の乳は嬰兒に消化不良を來すこと多し。又牛乳は數頭の牛より搾りたる乳を混和したるものなる可し、又搾乳に注意し清潔にして新鮮のものを撰び臭氣あるもの、變色せるものは避けざるべからず。

牛乳の稀釋法 牛乳を人工營養に使用するには豫め(一)蛋白質及び鹽類の含有量を人乳に近似せしむる爲之れを稀釋せざるべからず、(二)然れ共稀釋により其榮養價を減少し、糖分少くなるを以て之れを補はざるべからず、(三)且其爲めに元來血液と同じ濃度を有せし牛乳も稀薄となるを以て再び同じ濃度となすを要す。

要之に、血液と同じ濃度を有し、榮養價の不足を補充し得べきものを以て稀釋すれば可なり。而して其目的に最も適したるは水飴なり、實に本品は理想的調味料に屬し、其價廉にして其質良好なる上、都會と田舎とを問はず何所にも直ちに得易し。其一四%溶液は血液と濃度を等ふるを以て、一四%の濃度を有する水飴水溶液を以て牛乳を稀釋すれば、牛乳の濃度を變せず、榮養價を保存し、且糖分の缺乏をも補充するを得。

尙ヤコビー氏の研究によれば穀粉煎汁は牛乳内蛋白質の大塊的凝固を防ぐ力あるを以て、二位の稀薄なる葛湯又は米煎(重湯)に、一〇・〇%の割合に水飴を加へしものを以て牛乳を稀

釋すべし、かくせば血液より僅かに低壓にして榮養價、糖量等入乳と變りなき榮養品を得べし。

米煎の製法

五勺の米に一リートル(約五合五勺)の水を加へ、卅—四十分間煮沸し、上澄三合を採取したるものを普通米煎として用ふ。

牛乳稀釋の度は小兒の強弱、消化の良否及び發育の状態によりて加減せざるべからずと雖も大略左の標準に依る。

第一—三週	牛乳	水飴米煎溶液
	一分	三分
第四—八週	一分	二分
第三ヶ月—五ヶ月	一分	一分
第六ヶ月—七ヶ月	二分	一分
第八ヶ月以後は	純牛乳	

又は

第一ヶ月	牛乳	水飴米煎溶液
	三分	七分
第二ヶ月	四分	六分
第三ヶ月	五分	五分

牛乳の消毒法

牛乳消毒法 健康乳線内の乳汁は無菌なるも、搾取時又は其後器物との接觸、空氣等によりて通常有菌性となる、一旦有菌性となれば細菌は非常に速に繁殖して之れを腐敗せしめ、嬰兒に有害となるを以て消毒して殺菌し變質を防がざるべからず。

消毒法は種々あれ共最も簡單にして廣く用ひらるゝは煮沸消毒法なり。

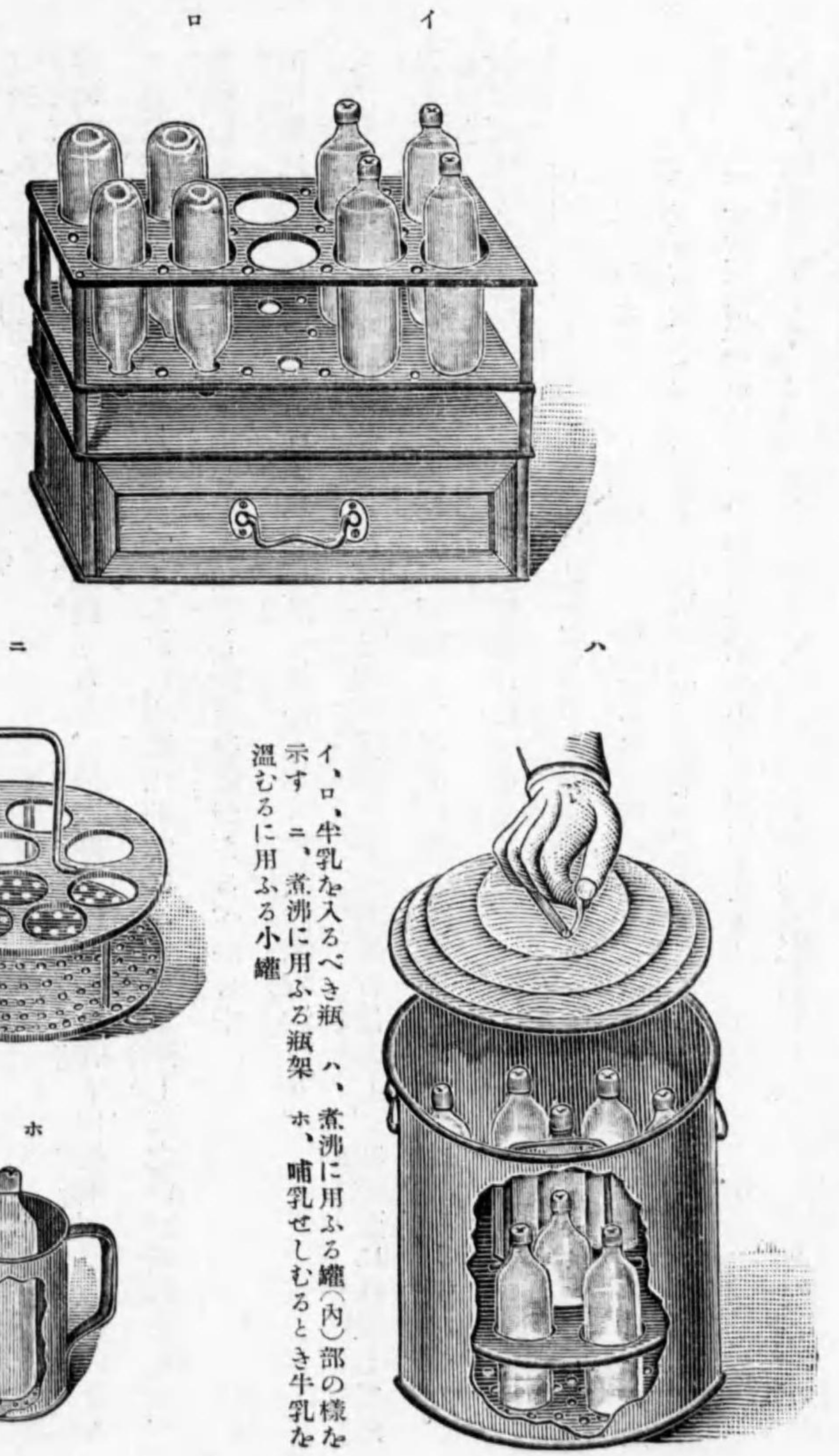
(イ)煮沸消毒法 通常の鍋を用ひて一定時間煮沸したる後再び冷却し、其被蓋に注意して外方より細菌の侵入するを防止し置けば概して不可なしと雖も夏季に於ては安全と云ひ難し。故に可成くソックスレー氏乳汁煮沸装置に由るを良とす。

ソックスレー氏煮沸装置は牛乳を容るべき護謨製被蓋を有する硝子瓶數本(其内容は一〇〇—二〇〇瓦)と、之れを入れて煮沸すべき圓筒形金屬製罐、及び之れに附屬する瓶架とよりなる。其他液量計(牛乳を量り之れを稀釋するに用ふ)、刷毛(硝子瓶を洗滌するもの)、鐵葉製小罐(哺乳時硝子瓶を三十七度に温むるに供す)、護謨製乳嘴、木製瓶架等を具ふ。

これを使用するには先づ適度に稀釋せる新鮮牛乳の哺乳一回量を計りて清潔なる硝子瓶に

第 二 百 十 四 圖

ツクレスー氏牛乳消毒装置の圖



イ、ロ、牛乳を入れるべき瓶、ハ、煮沸に用ふる罐(内)部の様を示すニ、煮沸に用ふる瓶架、ホ、哺乳せしむるとき牛乳を温むるに用ふる小罐

入れ護膜製被蓋を以て之れを閉ぢ、金屬製瓶架に排列して煮沸罐内に收め、更に罐内には水を盛りて瓶頸の下部に達せしめ、罐の蓋を被ひたる後一〇―一五分乃至三〇―四〇分間煮沸し、煮沸罐の蓋を去り瓶架の把柄稍冷却するを待ちて硝子瓶を瓶架と共に取出すべし、されば硝子瓶は漸次冷却し凡そ一〇分間を経れば外氣壓の爲め護膜製被蓋は固く瓶口に附着し其中央少しく陥凹するに至る、然る後之れを冷かなる場所に移して貯藏すべし。

ソックスレー氏装置を所有せざる時は、各一回の授乳量を硝子瓶に入れ、綿花を以て密栓し、水を盛りたる鍋の中に併列し、徐々に沸騰せしめ煮沸後約一〇分乃至一五分にて取出し、其儘冷却せしめ、冷所に貯へ置かば有菌性となる事なし。授乳の際綿栓の儘適當の溫度に温べし。前記の煮沸法によれば牛乳内の蛋白質變化し消化を困難ならしむるを以て近來低熱消毒法を推奨するものあり。

(ロ) 低熱殺菌法 七五―八〇度にて二十分乃至三十分間殺菌し直ちに氷室に入れて冷却せしむる方法にして、本法は比較的の殺菌法にして、普通の細菌及び乳酸菌、結核菌は死滅するも、芽胞等を死滅するに至らず。

本法による時は蛋白質の凝固を防ぎ、牛乳の變質を來すことなし。

(ハ) 高熱殺菌消毒法 牛乳を十五分間攝氏一一五度に熱する方法にして、確實なる消毒法なるも乳質に變化を來し、兒に障害を來すのみならず、一定の設備を要す。

(ニ)冷却防腐法 氷室内に貯蔵する方法にして、乳汁内細菌の繁殖を防ぎ、變敗を避くるを得るも、殺菌の作用なきものなれば、一旦殺菌消毒したるものを貯ふるに適す、殊に夏季に於て然り。

(ホ)藥物消毒法 消毒藥を混入して防腐殺菌するの法なれ共現今廣く行はれず。
牛乳營養の注意 牛乳は何れの貯藏法によるも之れを飲用せしむるに當り攝氏三十七度に温むるを要す。而して牛乳營養時の授乳は母乳を以て行ふ時と同様規則正しく行はざるべからず、即ち毎三時に一回とし、毎回の哺乳量は第一週は廿一六〇瓦、第四週に至る間は六〇一—一〇〇瓦、其後は一〇〇—二〇〇瓦とし、兒の消化及び糞便の良否に従ひて其量を斟酌せざるべからずと雖も、其概數を記すすれば、

一ヶ月兒	一一〇
二ヶ月兒	一二〇
三ヶ月兒	一三〇
四ヶ月兒	一四〇
五ヶ月兒	一五〇
六ヶ月兒	一六〇
七ヶ月兒	一七〇

右は夏日の量なり、冬期には一—二割増量す。

煉乳(コンデンスミルク)營養法

僻陬の地にして新鮮なる牛乳の供給意の如くならざる時は煉乳を代用するの外なし。煉乳は乳汁中に含める多量の水分を去り、白糖を加へたるものなり、故に大いに糖分に富むを以て稀釋時砂糖を加ふるの必要なし。本品は牛乳に比すれば消化器中にて醗酵し易く、從ひて胃腸を害し易きを以て、可成牛乳を用ひ、萬止むを得ざる場合にのみ之れを用ふべし。

煉乳を血液と同一の濃度になすには一三%となせば可なり、故に稀釋する際容積にては十一倍(重量にては八倍)より濃厚なるものを用ふべからず。又容積にて十五倍より稀薄なるものを用ゆるを要せず。

一日の需要量は約下の如し。

一ヶ月兒	四分の一罐
二—三ヶ月兒	三分の一罐
四—七ヶ月	五分の二罐(即ち一罐を約二日半に用ふ)

其他の營養品

牛乳及び其製品は以上の如くにして蛋白及び糖量を入乳に近からしむるを得るも、脂肪量著しく減少し、乳兒營養に不利を來すを以て、之れを補はん爲めに種々の製品調製せらる。然れども實際上豫期の效果を得ず、從ひて廣く行はるゝに至らず。

第十編 正規産褥及び其取扱法

混合榮養法

第三項 混合榮養法

天然榮養法に人工榮養品を混用して兒を榮養するを云ふ。母乳の不足する時にのみ行はる。此際普通用ひらるゝ人工榮養品は牛乳及び穀粉製劑なり。之れを行ふに二様あり、一つは人乳と他の人工榮養品とを交互に與ふるもの、他は同時に與ふる法即ち哺乳後不足分丈けを人工榮養品を以て補ふものなり、通常は第一の方法を選ぶ。此の時注意を要するは乳瓶よりの哺乳は吸乳容易なるを以て、漸次乳房を含む事を嫌ふに至る、故に乳瓶の護謨管に壓を加へ又は乳嘴の孔を小さくして乳汁流出を困難ならしむべし、否らざれば混合榮養は日ならずして純人工榮養に移行すべし。

産 婆 學 上 卷 終

産婆學 上 卷

正價金參圓八拾錢

大正拾四年十二月五日第一版發行
 昭和四年十月五日第二版印刷
 昭和四年十月廿日第二版發行



編輯者 岡 林 秀 一
 發行者 小 立 鉦 四 郎
 印刷者 加 藤 晴 吉
 印刷所 會社 正文舎 第二工場
 東京市本郷區湯島切通坂町八番地
 東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地
 東京市本郷區湯島切通坂町十四番地

發行所

東京市本郷區春木町三丁目三十二番地
 南江堂書店
 電話小石川三五二〇・三九六九番・振替口座東京一四九
 京都市中京區寺町通御池南
 南江堂京都支店
 電話上二〇三〇番・振替口座大阪一一五〇五番

56
245

終

